

## ベルナノス『歡び』における聖なるもの

野村, 知佐子

<https://doi.org/10.15017/8772>

---

出版情報 : Stella. 21, pp.157-166, 2002-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# ベルナノス『歓び』における聖なるもの

野村 知佐子

『悪魔の陽の下に』(1926年)は「嵐の夜に打ち上げられた花火」<sup>1)</sup>にすぎず、ドニサンという主人公もベルナノスにとって聖人ではなかった。それにたいし『欺瞞』(1927年)と『歓び』(1929年)を執筆中の作家はその登場人物であるシュヴァンスとジャンタルを「真の聖人」<sup>2)</sup>として愛した。しかしながらこれらの物語は、ふたりの聖人および彼らが救わんとした背教の司祭セナーブルの死によって幕を閉じてしまう。聖なるものがこのように3者の死をもたらず要因であるとき、ベルナノスにとっての聖性とはなになのか。彼と同時代に無神論の立場から聖性を追求した哲学者にジョルジュ・バタイユがいる。青年時代にすでにカトリックの信仰を捨てたこの哲学者と、常にカトリックの立場から戦いつづけたベルナノスとを同列に並べることはたしかに危険ではあるが、バタイユにとっての聖なるものを適宜引用することで、ベルナノスの描く聖なるものの一側面を照射したい<sup>3)</sup>。

\*

彼女〔クレルジュリ夫人〕はゆっくりとドアを開けた、そして黒い手袋をした片手をさしのべ、しばらくのあいだ敷居の上でじっとしていた。それからこっそりと眩しげに小刻みな足取りで歩き始めたが、その老いた小さな顔は、三重に巻きつけられた毛糸のショールに隠れていた。輝く光のなかで彼女は死者のように孤独だった。一筋の太陽の光がはすかいに端から端へと部屋を照らしていた。[533]

主人公ジャンタルの祖母であるクレルジュリ夫人の登場によって「歓び」は幕を開ける。ベルナノスの作品世界において敷居は、質的に異なるふたつの空間を隔てる境界線であるが、これに足をかけるクレルジュリ夫人はふたつの空間を自由に行き来する存在である。彼女は狂気に陥っており、それが偽物であ

ると勘づいていながらクレルジュリ家の鍵束に激しい執着を示す。なぜなら鍵束を所有することは屋敷の女主人であることの証であり、彼女はかつて自分の手からその地位を奪った息子の嫁ルーズにたいする憎悪と競争心を捨て去ることができないからである。しかし鍵束は偽物であるがゆえに、女主人としての地位もまた架空のものにすぎない。息子であるクレルジュリ氏の前では威厳を保って見せるものの、ひとたび彼の眼前を離れるや、彼女は召使いたちからあからさまに「駱駝」[540]と罵られるのだ。散歩に連れ出された戸外では、召使いのひとりから平手打ちを受けさえする。彼女は屋内では鍵を管理する女主人としての地位にしがみついているが、戸外では主従関係すら保つことのできないただの狂女である。こういったクレルジュリ夫人の屋内と戸外でのあり方から、ふたつの異なる空間の意味合いをつかむことができよう。つまり屋内が偽りの空間であるのにたいし、戸外は残酷な真実の支配する空間であるといえる。じじつ強烈な太陽の光に照らされる夫人の姿はシャンタルの目に次のように映る――

灼熱の空の下、このはてしない地平線を背景に、滑稽なほど黒く小さいその姿が彼女の閉ざされた臉の裏に焼きついている生物、それは祖母だったのだろうか？あるいはなにか昆虫だったのだろうか？彼女は踵の一蹴で震えるその声を踏みつぶすことができるとたやすく思いこんだかもしれないし、非情な青空のスクリーンの上に浮かぶその哀れな姿を、石炭で描いた一筋の線のように、ひとつの無法な文句のように手の中であぐい去ってしまうこともできたかもしれない。[611]

空の青の激しさの前で祖母は虫を連想させる惨めで卑小な黒いシルエットに還元される。屋内で女主人の象徴である鍵束にすがりつこうと、彼女は召使いにすら蔑まれる、虫のように卑小な哀れむべき存在にすぎない。また「激しい日射しの攻撃にさらされた」[614]彼女の顔からは「老齡が人間たちを覆ってくれるあの無形の密やかな陰影すらも」[614-615]奪われているが、すでに亡き義理の娘への憎悪を捨て切れぬあまり、時間の感覚すら喪失してしまった彼女に「老齡」のもつ「陰影」は少しも似つかわしくない。太陽の下、彼女の狂気に蝕まれた顔は残酷なまでに裸形のまま晒される。

このように太陽が全てのものに裸形を強いるとき、クレルジュリ氏は太陽を憎む。自分の真実の姿は露呈されるべきではないからである。彼は一日中鎧戸

を下ろさせ、太陽を遮断する。そのような彼の家は避難所として機能している。虚構の許されたこの屋内は、彼にとって安全で快適な安らぎの空間である。しかし屋内という、その卑小な空間は、狂った太陽の燃えさかる戸外の広大な空間とドア一枚で接しているにすぎない――

朝から晩まで錠戸を閉めているにもかかわらず、灼熱の太陽の下で、砂利がかすかな音をたててはぜるのが感じられたし、夜になると微風が立ち、熱気や家畜小屋の匂いを運んできた。[628]

屋内に太陽の光を入れてはならないというクレルジュリ氏の思いとは裏腹に、錠戸の向こう側に太陽は迫っている。理性に裏打ちされた西欧文化に異議を唱えたバタイユにとって、理性とは異常という大海に浮かぶ氷山の一角にすぎなかったことを思えば、『歓び』における広大な戸外には狂気と無償性、狭い屋内には良識と有用性というように、それぞれ相反する属性を認めることが可能であろう。

こうしてドアを開け放ち戸外を歩き回る者は、その赤裸々な姿を見せつけることによって、屋内に留まる者の不安をかき立てる。狂った母親はクレルジュリ氏の不安を煽る。しかしながら病理学という見地に立てば、彼と狂気の人である母親との間に一線を画することはむしろたやすい。屋内を支配する良識がここでは勝ちをしめる。にもかかわらず彼をしてラ・ペルーズ医師に向かい「私は狂人です、不幸な狂人、遺伝性の神経症です」[642]と叫ばせているものがあるとすれば、それは娘シャンタルの存在だといえよう。

シャンタルは、祖母であるクレルジュリ夫人と同様に戸外を歩きまわる者、またときとして瞳のなかに祖母と同様の狂気を宿らせる者でありながら、後者の狂気を癒す力を有する存在でもある。祖母の心を静めるために彼女は次のように語りかける――

ええ、私おばあさまを腕に抱えて運びました。羽毛のように軽かった。きっと神様の手のなかならあんな風に重みがなくなるものなのでしょう。蟻、そう、一匹のかわいそうな蟻です。蟻は倉を満たすために時を過ごして、それからたったひとり、小石の陰で死んでいきます。私たちも蟻を見習うべきです。[660]

太陽の光に晒された祖母がシャンタルの目に一匹の虫のように映ったことは先

に述べたが、ここでジャンタルの語る人間もまた「蟻」という卑小な姿を呈する。ジャンタルは祖母の所有する偽の鍵束を手渡すよう要求する。なぜなら偽の鍵束への執着は女主人の地位への執着であり、彼女の狂気の源だからである。狂気から解放されるために彼女は架空の地位を剥奪され、太陽の下でそうであったように一匹の昆虫に還元されなければならない。鍵束をジャンタルに手渡したとき祖母は「蟻」としての自分の姿を受け入れたのであり、心の平安を手にする。ここでの狂気からの解放とは、祖母の存在からあらゆる虚飾をとり去り、彼女をその裸形に還元することにはかならない。つまりジャンタルは戸外の太陽と同じ作用を人々におよぼすのである。しかるに祖母にとり狂気からの開放をもたらすこの作用が、自分の本質から目を逸らすことを願う人間にとっていかに苦痛を強いるものであるかは断るまでもなからう。先述した、自分を狂人であるとするクレルジュリ氏の嘆きは当然である。なぜなら精神科学アカデミーの一員であり、かなりの大貴族と見なされている彼の本質とは、先祖からの狂気の遺伝に苦しめられる哀れむべき人間にすぎないからである。以上のようにジャンタルの存在が祖母や父親をその裸形へと還元してしまうとすれば、彼女は太陽としての属性を有するものとして定義されよう。

ところで太陽の支配する戸外から侵入してくる力を恐れながらも、クレルジュリ氏は無意識のうちにその浸食を助長しているといえる。というのも地元に召使いを選ぶことを嫌った彼は様々な異邦人を家中に招き入れるのだが、これは得体の知れぬ外気を孕んだ者を内部に入れることを意味するからだ。しかも彼が著述活動をおこなっていることから数多くの知識人がこの家を訪れる。知識を愛するという行為がしばしば懐疑と結びつく傾向にある以上、知的であるがゆえに癒しがたい懐疑を背負った人物もまた招き寄せられる可能性がある。こうして異邦人のひとりとしてフォードルが、知識人のひとりとしてセナーブルがジャンタルと対峙することになるのだ。それでは彼らとの関係において、ジャンタルの太陽としての機能はいかなる側面を見せるであろうか。

\*

バタイユは『呪われた部分』のなかで、過剰なエネルギー体として太陽をとらえその無益なエネルギーの蕩尽のなかに聖なるものを見る<sup>4)</sup>。一般に太陽と

はすべての生命に恵みを与えるという側面をもつが、ここで問題にされる太陽は有用性の支配する世界の営みとは無縁のものであるといえよう。次の引用は『歓び』のなかに見られる真夏の太陽が、バタイユのいう有用性からかけ離れた過剰なエネルギー体に等しいことを示すものである――

なぜならあまりにも重苦しい夏のある時間帯には、自然は日射しの輝く愛撫の前に身を開いて横たわるところか、すくみあがってしまうかのようなのである。物言わず、猛々しく、身動きひとつせず、勝ち誇った相手の顎が、脇腹の致命的な部分に食い込んでくると感じたときの獣の諦めをもって。〔649〕

あまりに苛烈な太陽は自然を安らげることができない。自然は日射しにたいして「身を開く」どころか、日射しを前に「すくみあがってしまう」。太陽のもつ恵みという有益な側面は影を潜め、ひたすら燃やし尽くすという側面のみがここでは強調される。シャンタルが先に述べたように太陽と同一視されるなら、クレルジュリの屋敷のなかでいくら彼女が明るくふるまい、人々の役に立とうと力を尽くしても、その行為は彼らを暖めることはない。彼女はその苛烈さによって人々を燃やし尽くす存在だからである。クレルジュリ家に招かれたセナーブルはシャンタルにたいして「あなたやあなたに劣らず無垢で、純粋な、火のように純粋な人たちは」〔698〕という言葉を投稿るが、これは太陽としての彼女の属性を看破しているといえるだろう<sup>5)</sup>。

このとき火そのものに喩えられるシャンタルの極限性はその対極にあるものと結びつかずにはいない。彼女の存在がフォードルのような悪魔的な人間を挑発するのはこのためである。彼の故郷であるロシアの酷寒はその極限的属性において、屋内の人々を懊悩させる真夏の太陽に匹敵するといえよう。彼はかつて自分が故郷で見た聖女のことをシャンタルに語る。足を折られ、ロシアの冬にほとんど裸で打ち捨てられていながらも神によって天に召されたその聖女こそ、シャンタルと属性を同じくする者であると彼は言う。フォードルが召使い仲間のフランシーヌを倦怠のために誘惑するほどの過剰なエネルギーを有するとすれば、彼もまたシャンタル同様、その過剰によって人々を苦しめる者である。両者の関係性は、シャンタルの次の言葉のなかに明確に示されている――

「何という夏でしょう、と彼女〔シャンタル〕は言った。これでは今に敵を憎むよう

にして光を見つめるようになってしまいますわ。そのために冬はますます暗く思われることでしょう」[704]

太陽であるシャンタルは人々を暖めようと欲するも、その過剰ゆえに彼らを苦しめることしかできない。彼女は人々を恐れさせる、燃えあがる一つのエネルギー体である。しかし彼女が火と燃えあがるほど、その極限性ゆえに冬と結びつく。冬としてのフォードルがシャンタルのなかに見いだすのは、彼の悪魔的な属性と表裏一体で存在する極限性としての聖性である。彼女の聖性を前に、フォードルはいよいよその「暗さ」を増していく。

ところで先のシャンタルの言葉にたいしてセナーブルは次のように答える——「我々は夜を憎んでいる。しかし昼もまた同様に克服しがたいものだ」[704]。クレルジュリの家招かれたセナーブルは癒しがたい懷疑に苛まれ、不眠の夜ひとり庭にたたずむ。自分の落ち込んだ闇のような懷疑を彼は憎悪するが、聖なる太陽と対峙するには彼はあまりにも懷疑に蝕まれすぎている。シャンタルを火に喩える彼は、聖なるもののエネルギーの過剰に気づいている。彼が懷疑という夜を乗り越えるためには灼熱の太陽としての聖性に身を晒さなければならない。セナーブルの悲劇性とはこの究極的な二者択一によって、その身を引き裂かれることであるといえよう。以上のようにフォードルとセナーブルというふたりの人物との関係性から、過剰なエネルギー体としてのシャンタルの、他を燃やし尽くす側面が明らかになる。

ところで太陽とは他を燃やすものであると同時に、自分自身をもまた燃やし尽くすものである。とすればシャンタルが太陽として完成するためには、無益な蕩尽が彼女自身の身にも起こらなくてはならない。ではシャンタルの姿に無益な蕩尽という属性は認められるであろうか。次の引用は、自身を燃やし尽くす太陽としてのシャンタルを象徴するものであるように思われる——

彼女ははてしなき陽光のなか、塵と真昼のきらめきのなか、腕を折り曲げて胸のなかに老婆を抱えた自分の姿を思い浮かべた。[680]

シャンタルの祖母が狂女であるとき、彼女が聖性と信じるものは狂気の一形態にすぎないのかもしれない。じじつ彼女はかつて鏡に映る自分自身の瞳のなかに祖母と同様の狂気を見た。狂気ほど聖性を無力なものへと還元する要素はあ

るまいが、それを知りつつ、彼女はここで狂気としての聖性を選び取る。シャンタルの選択は、彼女がその胸に狂気の祖母をしっかりと抱きかかえるという行為によって表される。しかもこの無力さを完璧なものにするために、彼女はその最も恐れることを実現することが要求される。彼女の恐怖することとは、彼女が聖なるものと信じたことをフォードルが人々の好奇の目に晒し、狂気として嘲弄の対象にすることである。この最悪の事態を実現させるべく彼女は家に向かって歩くのである。こうしてシャンタルはフォードルによって殺害される。彼女の死は人々の好奇の眼差しに包まれ、その聖性は単なる狂気として嘲弄されることであろう。シャンタルの死について料理女のフェルナンドは次のように言う――

「お嬢様はいくら辱められても足りないというお方でした。軽蔑しか望んでいらっしやらなかったし、どんな場所に生きていくことだっておできになったでしょう。もちろんあのロシア人は私たちみんなのなかで一番の悪党でした。だからこそお嬢様はあの男から死を受けたいとお望みになったのだと思います」[723]

自分の生命を自分が最も忌み嫌う者の手に委ね、破壊させることほど、蕩尽の名に値することはあるまい。フォードルによるシャンタルの殺害は、彼女の生に究極的な蕩尽の様相をあたえる。究極の蕩尽が聖性に通じるとすれば、シャンタルの聖性は彼女を滅ぼす者の手によって完成されるという逆説的な様相を帯びるのである。太陽が太陽として完璧なものになるためには自分自身をも焼き尽くさなければならぬ。シャンタルの師であるシュヴァンスもまた、信仰を喪失したセナーブルを前に自分自身を燃やし尽くす。

シュヴァンスはかつて自分の教区で犯した過失のために教会から追放されかけたという怪しげな経歴をもつ、無知蒙昧な司祭である。有用性という見地に立てば彼は無力そのものである。そしてその無力さは「欺瞞」の最終章で死の見せる幻覚のなか、セナーブルを神に立ち返らせようとするも叶わず死を迎えるときその極点にたつする。理性的見地に立てば彼の死は不条理である。なぜなら彼はセナーブルを回心させることができないばかりか、セナーブルとかわした対話さえ彼の夢にすぎないからである。しかしシュヴァンスが彼の陥った絶望的な状況を明晰な目で見つめ、恐ろしい孤独のなかで苦しみ抜いて死ぬこのシーンは、アントナン・アルトーに激しい衝撃を与える<sup>6)</sup>。彼にとって、セ

ナーブルに相たいするシュヴァンスの一連の行為が夢にすぎないという事実など、この司祭の苦しみから発散される絶望の滲出の前ではなにもものでもない。また、ミシェル・エステーヴは、死の床におけるシュヴァンスの、一見無益ともとれる苦しみが人々の罪を贖うキリストのそれと重なるものであるとする<sup>7)</sup>。苦痛にたいして注入されるエネルギーの莫大さはすなわちシュヴァンスの生命の蕩尽を示すものである。

このシュヴァンスとは対照的に、セナーブルはアカデミー会員として聖人についての精力的な著述活動を続けており、道徳的にも非の打ちどころがない司祭として描かれる。彼の社会的有用性はまさに完璧といえよう。だがシャンタルとの対話のなか、信仰のない司祭としての自分の姿に激しい絶望を覚えた彼は、無意識のうちに死を求めて窓辺へおもむく。虚空のなかに落ちていくことを欲する体をひきとめながら、彼はかつてピストル自殺を試みるも失敗したこと、そのとき自分がけっして墜落死を望まなかったことを思いだす。彼が望んだのは投身という体を砕く行為ではなく、ピストル自殺という頭を砕く行為なのである。シュヴァンスの夢のなかでもまた、改宗を迫るこの無力な司祭を厭うあまり、セナーブルは手にした燭台の炎で自らの頭部を焼く。ピストル自殺の試み、炎に包まれるセナーブルの頭と、頭部破壊のイメージがくりかえされた後、フォードルによって殺害されたシャンタルを前にした彼は「我らの父よ」[724]という言葉とともに狂気におちる。シャンタルがその落命によって太陽としての機能を完成させたとき、セナーブルを取り巻く闇は焼き尽くされ、彼は「克服しがたい」[704] 真昼の光に晒されたといえよう。狂気とは知性と意志を司る頭部の麻痺にほかならぬとき、セナーブルの発狂とはすなわち頭を打ち砕かれること以外のなにもものでもない。3度にわたるピストル自殺の失敗に表されているように、彼が自らの手でその頭部を砕くことが禁じられていたとすれば、それは神の手で打ち砕かれるためであったかのようである。セナーブルの知性と意志力が並はずれたものであればあるほど、その破壊は莫大な蕩尽となる。バタイユによって定義された聖なるものが本質的に無力なものであり、瞬時の激しく無益なエネルギーの燃焼にすぎないとすれば、有用性の側に立ちつづけたセナーブルの生は、その理性の崩壊によって最期の瞬間に聖なるものに変じたといえるだろう。

以上のように、シャンタルはフォードルに破壊されることによって自らの命

を蕩尽した。彼女の落命はセナーブルを取り巻く闇を焼き尽くし、彼を聖なる光に晒すことによってその命を破壊する。シャンタルの死は、自他ともに燃やし尽くす太陽としての聖性の極点であるといえよう。

\*

聖なるものを巡る物語は不条理そのものである。有用性の見地から語るとき、シャンタルの生がただ彼女にとって最大の汚辱のなかで終わるとするならば、その生は無益である。また、努力を重ねたセナーブルの生が欺瞞にすぎず、その事実気づくことが彼の死を意味するのなら、気づかせたシャンタルの行為は無益である。さらには真実に気づくことによって砕け散ることがセナーブルの生であるなら、彼の生は無益以外のなにもものでもない。しかしながらこの無益さのなかに物語のタイトルである『歓び』という言葉が浮かびあがるとき、無益なエネルギーの蕩尽であればこそ畏敬の念を感じさせる聖なるものの様相が逆説的に浮かびあがるのではあるまいか。

## 註

- 1) Cité par Albert BÉGUIN, *Bernanos*, Paris: Éd. du Seuil, coll. «Écrivains de toujours», 1954, p. 173.
- 2) *Ibid.*, p. 161.
- 3) バタイユは、西洋文明がその基礎を置く理性を中心とした世界が、無秩序と混沌の海に浮かぶ小さな島にすぎないという立場から聖なるものへのアプローチを行った。彼によれば人間の常態とは理性よりも、むしろ狂気のなかに見いだされるべきであると考え。そして聖なるものは狂気のなか位置づけられる。それは生命の高揚と沸騰であり、その体験が終了するや、ただちに否定されねばならぬ性質のものである。こうした状態が未来を目指すものではないことは断るまでもない。ときとして爆発的な力を発揮するその状態をバタイユは力 (*force*) と定義し、それがいかなる力 (*puissance*) と結びつかないことから本来的に非力なもの (*impuisant*) と見なした (酒井健『バタイユ入門』, ちくま新書, 1996年, 126-132頁参照)。なお『歓び』のテキストとしては、プレイヤッド版『小説集』(Georges BERNANOS, *Œuvres romanesques*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1988) を使用し、同版からの引用にあたっては、そのページ数のみ本文中

- [ ] 内に示す。訳出にあたっては山崎庸一郎による邦訳（『ベルナノス著作集』第1巻，春秋社，1976年）を参考にした。
- 4) バタイユは『呪われた部分』のなかで太陽光線を地球の表面にエネルギーの過多を生じさせるものとしてとらえる。またアステカ族においては、神が地上を照らすために火のなかに飛び込むことによって太陽が生まれたというその創世神話により、太陽そのものが犠牲の表現となることを指摘している。『呪われた部分』（生田耕作訳），二見書房『ジョルジュ・バタイユ著作集』第6巻，1973年，58-62頁参照。
  - 5) 聖なる者によって苦しめられた凡庸な者が迫害者になるという構造は、ジャンヌ・ダルクに詰め寄る異端審問者たちのそれであるとフィリップ・ル・トゥーゼは指摘する。彼によれば、ジャンヌ・ダルクにたいして、彼女の聞いた声は神からのものではないと迫る裁判官のように、凡庸な者たちは、シャンタルの秘密である聖性を取るに足りぬものと見なそうとするのである。Voir Philippe LE TOUZÉ, *Le mystère du réel dans les romans de Bernanos*, Paris: Libr. A.-G. Nizet, 1979, p. 139.
  - 6) シュヴァンスの孤独で絶望的な死に感銘を受けたアルトーはベルナノスに次のような手紙を書き送る——「シュヴァンス神父の死は、生涯において最も悲痛で絶望に満ちた思いを私に与えました。胸を突かれるような恐ろしい思いが、悔恨のようにあなたを責めさいなんているかのようです。それではこの私は自分にとって絶望的ともいえる死によって滅びるべく定められているのでしょうか？ 物であれ人であれ、それが不幸という領域を感じさせることは稀です。苦しみによって発散される絶望の滲出、それを前にすればもはや取るに足りぬ幻覚の描かれたページのなかに見いだしたように、苦々しさと涙とに満ちた袋小路を、無益で黒々とした苦痛に苛まれる袋小路を見いだすこともまた、稀なことです。あなたにとって私が、神に見放された者であるのかどうかはわからない。しかしいずれにせよ、あなたはその痛ましい明晰さにおいて 私の兄弟なのです」(BERNANOS, *op. cit.*, p. 1798)。ベルナノスはこの手紙を生涯大切に保管していたという。
  - 7) Voir Michel ESTÈVE, «L'agonie christique de Chevance», in *Paradoxes et Permanence de la pensée bernanosienne*, Paris: Aux amateurs de livres, 1989, p. 59.